

第二期 第百十五号

(初版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

学びあう人々のために

2026.02.10 定有堂書店 発行

ルー・リードの太極拳

「ブックインとつとり」と「読む会」

風呂キャンと帰省

日々是雑言(ぞうこん) 13

普遍的ノスタルジア

ときめく本棚の魔境編

Own Up Time

本を作る側から (35)

論語について (9)

立春の卵

内坪井町日記 (20)

迷った先のわたしの言葉

としのはじめのめがねとて

冬の「おとんグルメ」

編集後記:

奈良 敏行

岩田 直樹

堀内 菜摘

萩原 俊郎

板野 円香

おぎはらきえ

高木 善祥

村瀬 謙介

小原 修治

ムラカミヒロミ

齊藤 仁昭

三浦 永理

あきの素生

ドラメリア

ルー・リードの太極拳

奈良 敏行

(定有堂 主人)

詩人の白井明大さんが、ヴェルヴェット・アンダーグラウンドのリードボーカルのルー・リードが、太極拳の本を出したみたいだよと教えてくれた。二〇二五年十一月の中頃のことだった。白井さんは、音楽と武術の二つの異なった世界にまたがって生きる人の存在を、無視できないようだった。

『俺の太極拳』国書刊行会の本のことだ。ルー・リードは二〇一三年に亡くなっているので友人たちが思い出を書き集めた本だ。みなアートの携わる人たちが、ここにはただリードが異常に太極拳が好きだったという事のみが書かれている。リードは太極拳をするために薬物への依存も振り切っていた。不思議な人生のようにも思える。

友人のラムンチョ・マッタ(ミュージシャン・造形作家)はラムン・リュイの「運命の輪」という言葉を援用している。

《ある目標を持った場合、それがなんであれ、それを達成させるためには必ず、それ自体とは異なる別のふたつの事物と関わる必要があり、それをしないと絶対にうまくいかない》

恣意的な解釈のようにも思えるが、友人マツタは「ふたつの事物と関わる」生き方の驚きをルー・リードに発見したようだ。

他の友人は「太極拳は彼にとってライフスタイルだった」という。また別の友人は「太極拳や瞑想をするのも自分の中にいる悪魔を鎮めるためだ」といつている。

鎮めなければならないものが人にはあるのだろうか。リードの太極拳は型武術だ。一つの武術の型の中に狂気を閉じ込めていく。その狂気は拳の先から相手へとさし込まれることはない。太極拳には「昇降開合」という知見がある。狂気は天と地へ解き放たれるだけだ。破壊へは向かわない。呼吸を合わせて外部と一体化する方法だ。リードの音楽はどうだろう。太極拳と出合ってから「ハドソン・リバー・ウィンド・メディテーションズ」というシンセサイザーを用いた、ブーンという音がうねりつづけるドローン音（持続低音）の曲を作っているという。クリスタル・ボウルのような無限反響音だ。ダークサイドの音楽のようで、わたしは好きにはなれない。狂気（闇）を押さえつづけること

を目的とした、いつまでも解放されることのない曲は、ルー・リードには必要だったのだろう。

《太極拳の哲学は深いよ。そこには自己消滅の概念がある。太極拳をやっているときの自分は、もう自分ではない。つまりエゴを乗り越えているということ。そうやって徐々にエゴをなくしてゆく。太極拳をやってエゴをなくす。それが理想。》

ルー・リードの告白だ。「エゴを乗り越える」という課題を持って生きる。どうやって乗り越える。そこに存在のもう一つのあり方が立ち現れる。存在の二つのあり方を自覚的に生きる。秩序により形成され安定した「自我（エゴ）」と裂け目に現れる「主体」、とそれと呼んでみる。

わたしは太極拳の志向性を「する」と「なる」というふうに考える。伝わりにくい言葉だが、もともと伝えようとも思っていない。リードのドローン音の世界だ。わたしの狂気（闇）は「初発衝動」と「オブセッション」だ。この熱量をどのようにして型の中に押さえ込んでいくか、それが長年の課題だった。「する」は頭脳や知性の行為だ。一方「なる」は身体性の営みだ。

人生の速度をゆるめる。「する」と「なる」が等速度になるように時を止める。知識は時間と共に増えていく。増えずぎてやがて人を身動きのとれないものにしてしまう。

身体は引き算する。時が経てば経つほど、できることが少なくなっていく。

「自我（エゴ）」は闇におおわれる。反して「主体」の場からは外部が見える。必要なのは自我（エゴ）からの引き算だ。

二つのことにまたがって生きる。それは同時には出現しない。壺に見えたり顔に見えたりする「ルビンの壺」だ。「する」と「なる」。太極拳には「唐突にやってくる覚醒の瞬間」があるという。ほんの少し、闇の中に光が差す。闇を飼い慣らす方法は百人百様だ。だからこの「覚醒」の光について語り合うことはいまだにない。

2025.12.30

ルー・リード 『俺の太極拳』 国書刊行会 2025.12

奈良敏行＋三砂慶明

『本屋のパンセ』

作品社 2025



定有堂教室「読む会」 (講師 岩田直樹氏)

定有堂教室「ドウルーズを読む会」

定有堂教室「読書室ビオトープ」

それぞれ会場は とりぎん (県民) 文化会館

葉香太極拳クラブ

会場 麒麟スクエア (市役所二階 水曜夜・土曜昼)

・定有堂教室と太極拳の詳細は
下記の、QRコード参照

(@ドラメリア)



『音信不通』紙版の置き場

・県立図書館2階パンフコーナー

・エスキース (倉吉) ・森の生活者・邯鄲堂・

・SHEEPSHEEP BOOKS (定有堂ビル2階)

・定有堂ビル2階「音信不通」編集部



「終わる」と「続く」

―「ブックインとっとり」と「読む会」

岩田 直樹

(再解釈本舗・「読む会」講師)

一九八八年(私が就職した年)、「ブックインとっとり・地方出版文化賞」と「読む会」は始まった。「地方出版文化功労賞」審査は二〇〇四年、「読む会」は一九九四年から関わっている。今年でそれぞれ二二年目、三三年目である。人の一生にとって決して短い時間ではない。

『音信不通』二月号が定有堂ホームページに掲載されているときには、「ブックインとっとり」は三八年の歴史に幕を下ろしている。一月三十一日(土)に地方出版文化功労賞の表彰式・受賞記念講演が行われ、それをもって多くの関係者のボランティア精神に支えられて地方出版文化を奨励・激励し続けてきた全国唯一の賞がなくなるのである。

「ブックインとっとり」とは何か。三〇周年のパンフレットにはこうある。「地方文化のバロメータのひとつとも言われる、地方での出版活動の重要性に目を向けたブックインとっとり実行委員会では、一九八七年鳥取県で開催されたブックインとっとり87「日本の出版文化展」いわゆる「本の国体」

を機に「ブックインとっとり・地方出版文化功労賞」を制定した。以来三〇年に亘って、地方と地方そして人と文化の交流を積み重ねてきた。その結果今日では、地方出版への激励や奨励として貢献してきたことが全国から高く評価されている。」(さらに詳しく知りたい方は二〇一七年十一月の「今月読んだ本」第一八六回を参照していただきたい。)

毎年上半期、約一〇〇人の審査員が一〇冊前後の候補作を一ヶ月かけて読む。東京と鳥取県以外で出版された本が対象であり、昼間は仕事をしながら審査本を読み続けるのはひと苦労だ。審査の原動力は、地方出版を顕彰して地域の文化を少しでも豊かにしたいという強い思いである。

過去の功労賞では、アカデミー賞外国語映画賞(二〇〇九年)の映画「おくりびと」の原作である青木新門『納棺夫日記』(第七回、富山・桂書房、一九九三年)、平凡社ライブラリーのロングセラー渡辺京三『逝きし世の面影』(第二二回、福岡・葦書房、一九九八年)などが有名だ。私が審査員になってからは、地を這うような緻密な取材で定評のある渡辺一史の『北の無人駅から』(第二六回、北海道新聞社、二〇一一年)が最も印象に残っている。乗り鉄が書いた秘境駅の話だと思われるのだが、駅の背後にある人々の生活、歴史(開拓史)などを克明に描いた生活誌、民衆史の名著である。

私が審査するのは毎年一月か二月だった。どんな本に出会えるのか楽しみにしていたものだ。そのルーティーンがなくなるのはとても淋しい。現在、一人出版社や一人書店が増えているという。故長嶋茂雄氏の言葉を借りて「地方出版文化は永久に不滅です」と叫びたい気持ちである。

「終わる」ものがあれば「続く」ものもある。

三年前の四月、定有堂書店が閉店した。店舗は終わったが「読む会」は続いている。閉店の二ヶ月後、鳥取県立図書館で「定有堂・読む会フォーラム」が開催された。タイトルは「定有堂書店・読む会」の展開―街の読書運動の可能性―。詳しくは、定有堂ホームページ掲載の奈良さんの講演「定有堂の生成変化」、私の「今月読んだ本」第二九・三〇回をご覧いただきたい。

「読む会」は鳥取西高校の名物教師（日本史）であった濱崎洋三先生（一九三六―一九九六）と奈良さんの出会いから始まった。

一年八組で行われた最後の授業「伝えたいこと」は今でも鮮明に覚えている。約百人の教え子たちは教室に入りきらずに廊下にあふれていた。参加した誰もが先生の言葉を一言も聞き漏らさまいとしていた。七〇分の授業を終えた先生は「途中で痛みが消えてな、この調子なら冬季補習授業もやってみようか」とおっしゃっていた。一ヶ月後に他界されたとき、「あんな

なお元氣そうだったのに」と言葉を失った記憶がある。

一九八八年当初は「岩波新書を読む会」だった。いつの頃からか「読む会」となり、哲学・思想・歴史・社会などを扱った新書文庫を中心に毎月読んでいる。開催は四五〇回を超えているはずだが、なぜか近年は第〇〇回「読む会」と言わなくなった。「こんなに続いているんだ！」と開催回数にこだわっていた私も、いつからか数えることをしなくなっている。

毎回一〇人前後の参加がある。メンバーは転勤、卒業で入れ替わることもある。「読む会」は堅苦しい勉強会とはほど遠い。①参加は自由、②課題本を読んでこなくてもいい、③他人の意見を否定しない、④課題本をリスペクトする、⑤雑談やおしゃべりはOK、という「ゆるい会」である。この「ゆるき」が「続く」要因の一つかもしれない。

二〇二六年は「戦後八〇年を超えて」「哲学・思想・歴史」「社会」の三つのテーマで、琉球処分、内務省、日本終戦史、世界哲学史、コミンテルン、ユダヤ人の歴史、在野と独学の思想家・研究者、ケア、日本語、建築などの本を読む。興味のある本を扱うときだけでもよいので、気軽に参加していただきたい（日時などはホームページ参照）。



風呂キャンと帰省

堀内 菜摘 （仙台市在住）

年末、入浴をサボる「風呂キャンセル界限」というものをしてしまった。12月27日から奈良の実家に帰省したのだけれど、何かがぶつんと切れたかのように怠け者になった。

翌朝、父がくれたコーヒーマシンの香ばしいにおいで目が覚め、母の「お風呂沸かしたよ」の声につられて布団からはい出た。眠い目をこすりながら、いい香りの入浴剤が入った湯船に漬かる。そんな日が3日も続いた。

30日の夜、母に「明日は大みそかなんだから、お風呂に入りなさい」と言われ、子どものように「はい」と答えた。父が「きつと家ではちゃんとしてるんよ」と言い、母が「それは分かってる」と言う。2人が笑い合っているのを横目に、お風呂に向かった。

私が一人で暮らす仙台の家では、「風呂キャン」なるものがない。家に来た友人から「これぞ丁寧な暮らし」と言われるように、きれいな性格が前面に出た暮らし方をしている。そんな自分とかけ離れた「風呂キャン」を3日も続けてしまったことに、情けなさや申し訳なさを覚え始め、30日以降はしっかり夜に入浴した。

これまで、帰省時にぐっすり眠ることができるのは、自分の家にある安物のベッドよりも、畳の上に敷いた布団の方が心地よいからだと思っていた。社会人4年目になって思うのは、「大丈夫、ここは安全地帯だ」という感覚。

私が生まれてから26年。長い年月をかけて両親が築き上げてくれた、実家でしか味わえない安心感に身をゆだねる。その中の、最大の甘えが「風呂キャン」だったんだろう。私、甘えてまーす！ という表明のような行為だった。

年が明けた2日は、母と初売りを楽しんで、仙台に戻る日。どの店で買い物をしようか、何を食べようか、と父がくれたコーヒーマシンの飲みながら、母とにぎやかに話していた。

母がふと席を立つと、父がちよっぴりさみしそうな顔で

「次はいつ帰ってくるんや」と言った。

「夏ごろかな」

「そうか、楽しみに待ってるわ」と父は控えめに笑った。その表情が心に残った。

2日の23時ごろ、仙台の家に戻った。

関西との寒暖差に驚きながら、寝室の暖房をつけ、その足でお風呂を沸かした。「風呂キヤン」をし続けた怠け者の自分と、「きつと家ではちゃんとしてるんよ」と笑う両親を思い返して、思わず笑った。

ああ、いい帰省だったな。

セイコー時間白書2019によると、20代後半の自分が、母親と会って話せる「生涯残り時間」は、別居の場合、42・3日。父親とは19・6日だそう。

2025年を振り返ると、実家に帰ったのは、年始の数日間と、大阪出張時に立ち寄った数時間だけだった。

そういえば昨年の夏、両親が仙台まで来てくれたことが

あった。行きつけの店に一緒に行った時、普段よりも多くのお酒を飲んだ父。「東北のおいしいご飯を食べて、仕事、頑張ってるんやな」。父は、私の日常を想像するかのようになんと言った。

母とはよく長電話をして、仕事やプライベートの話をするが、父と長時間話したのは久しぶりだった。今になって、離れて暮らす娘を心配して会いに来てくれたこと、頑張っているのを知ってほっとした言葉だったことが分かった。

控えめに笑う父を思い出す。

夏とは言わず、春に帰省しよう。休める環境をつくるために、しっかりと働かなきゃだな。

「年3回以上の帰省」が今年の目標になった。

日々是雜言（ぞうごん） 13

萩原 俊郎

（倉吉市在住者）

日ごろ気になることを、つれづれなるままに。

「本当の老後」がやって来た

昨年末、先妻と長女の永代供養を行った。どちらも亡くなつて十数年、いつまでも手元に遺骨を置いていては、と思ひ、檀家ではないが住職とは長い付き合ひの寺に預けた。自分もやがてそこに入る予定だ。

また退職後、乏しい年金生活を支えてくれた大山のゲストハウスも、「お父さん、亡くなる前にちゃんと始末しといてよ」という娘たちの声を受け、年明けから事業承継の手続きを進めている。引き受け手が見つかつてよかった。元いた新聞社の三年がかりの社史の執筆・編集も、今年五月、ようやく終わる。

ふと、七十年代突入まで二年を切ったことに気づいた。退職

してから、皮肉なことに「とりあえずメシを食わなければ」と、あたふた働いて過ごしてきた。六十代は、かくもあつてなく過ぎ去るものか。なんだか急に「本当の老後」がやって来た感じだ。

「何をしてもいいし、何もなくていい」老後の生活は、なかなか取り扱いに苦労する。しかも、人生で一度きりの体験、いつまで続くか分からない旅である。さて、「悔いなき人生」とやらを送るには、どうしたらいいのか。

それにしても周囲をながめれば、国の内も外も、もうグチャグチャである。「自分を総理と認めてもらうための解散」だつて？ 呆れてものも言えない。テレビをつけると、あのふんぞり返つた大統領の顔が毎日映る。「この齢になつて、まさか、こんなひどい世界になるとは」。同級生同士で再婚した今のカミさんと、深いため息をつく。

遠のく「米百俵」

日本人は、もう少し頭がよいと思つていた。

はつきり言つて、この総選挙、どちらが勝とうがお先は真つ暗である。悲しいことに、与野党そろつて「減税ポピュリズム」を競っているからだ。

消費税廃止や「年収の壁」引き上げは、物価高に苦しむ国

民から歓迎されるだろう。でも、それは一時の対症療法に過ぎず、野放図な国債発行と財政の硬直化はさらなる円安を招き、物価高はますます深刻化する。

前にも書いたが、幕末から明治の長岡藩が財政の窮乏を克服した「米百俵」の言葉が、かつて年末の流行語大賞に選ばれるほど、日本人に人気だったことがある。

米をよこせと押しかけた藩士らに「百俵の米も食えばたちまちなくなる。教育にあてれば明日の一万、百万俵となる」。今はがまんしても、未来の自分、そして子や孫のために使おう。そう説いた藩の指導者がいた。米を売った金で学校を建て、同藩は優秀な人材を輩出した。

今、有権者に「これをやるなら、これはやめよう」と呼びかける政治家はいないものか。「ポリシーある政治家とは、本来そういう人間を指す」と友人の政治学者、山口二郎。「米百俵」は日本人からますます遠のいていく。

「英国病」に学ぶ

さて、この傾きつつある国で、どう老後を暮らすか。

昔、鳥の劇場の中島諒人さんを取材した際、「一九五〇年代、『英国病』と呼ばれるほど国力が衰退した英国はアーティスト・スクールをつくり、芸術文化を振興した」そこからビ-

トルズやストーンズが生まれ、たつぷり外貨を稼いだわけですね」と話が盛り上がったことがある。

「親世代より子どもの方が貧しい」という悲哀を、英国民は日本より半世紀以上も前に体験している。でも、彼らはなんだか明るく幸せそうである。

自宅のガレージで、成人を迎える娘のためローバー・ミニをこつこつDIYで組み立てている英国のお父さんがテレビで紹介されていた。「金はないけど、楽しいからね」と彼は言う。「近所では別に珍しくないよ」。

財布と相談しながら、自分なりの喜びや楽しみを見つけてる力。ここはひとつ、「英国病」に学ぶうではないか、というわけで、年明けに中高年バンドを結成した。その名も「シルバー・ビートルズ」(笑)。この齢でハラハラドキドキ、大いに恥をかくのも悪くない。おとし手に入れたカブで、まだ見ぬ日本の山野を旅して回るのもいい。

いつまで健康寿命が保てるか分からないが、目の前に広がるのは、山あり谷ありのロング・アンド・ワインディング・ローグ(老後)である…おあとがよろしいようで。

普遍的ノスタルジア

板野 円香

(薬剤師・岡山県在住)

前回、私は文学や芸術作品において「幽霊が消えない理由」について書いた。それは、過去の出来事や失われた記憶が想起されるという話ではなく、「不在そのものが感覚的構造として立ち上がる」というものであった。タルコフスキーの映画『ノスタルジア』や Tempalay の楽曲『Ghost world』も、意図的にそうした性質(ある意味、異質なもの)を内包した作品であり、観る者に対し強い郷愁を呼び起こす。だが、おかしなことに、この「郷愁」というものを、別の形でも経験している。しかも、作品を通じてではなく、現実世界においてである。生きる世界で現れる、理由の分からないノスタルジア。今回はそのことについて書くと思う。

もう十年以上前の話にはなるが、その日、私はスロバキアの片田舎を訪れていた。目的はスピシュ城(廃墟)という『天空の城ラピュタ』のモデルにもなった城を見るためである。駅からバスに揺られること数時間、ついに目的地であるプレ

シヨフの町に降り立った。町には赤橙色の屋根をした小ぢんまりとした家々が並び(風化している建物も多かった)、古都という言葉がよく似合う街並みであった。しかし、その日は霧が強く出ており、古城へ上る道がなかなか見当たらない。プラプラと歩き回っていると、白縁の霧がかかる緩やかな勾配のある平原が視界に入り、その風景に泣きたくなるような寂しき、安堵感を覚えたのである。それは不思議な感覚だった。私の記憶に似ても似つかないこの風景が、なぜこんなにも懐かしいのだろう——そんな違和感が残った。

この違和感に対して、心理学や神経科学はどこまで答えを用意しているのだろうか。近年、ノスタルジアの神経基盤については、脳画像研究によって徐々に明らかにされつつある。

オオ바らは、fMRIを用いた研究において、海馬と報酬系が活動することで、ノスタルジア体験が生じることを報告した(Oba K, 2015)。この研究では参加者に対し、幼少期と結びつきやすいが、それ自体は特別な感情を伴わない写真を見せ、その後の情動反応を検証した。その際、「懐かしさを感じるように」と誘導するようなことはしなかった。にも関わらず、参加者は強いノスタルジアを報告し、その最中、海馬と報酬系の回路が同時に活動していたのである。

さらに興味深いのは、この研究において、ノスタルジアの

強さが「どれほど鮮明に思い出せるか」では説明されなかった点である。むしろ、ぼんやりとした *misty* のような過去の再活性が重要であつたと報告されている。これは、ノスタルジアが詳細な出来事の想起ではなく、過去の全体像や雰囲気、価値づけを伴って知覚される現象であることを示している。

つまり、ノスタルジアは鮮明な記憶を必要とせず、刺激に触れた瞬間に、自動的に立ち上がりうる体験だということだ。しかし、それでもなお、ノスタルジアには「自身の経験」へのリンクが前提とされている。

では、心理学面ではどう解釈されているのだろう。自分が生きたことのない時代や場所に対して覚える懐かしきについては、アネモイア (Anemoia) という言葉がある。直接には経験していない物事へ郷愁——。しかし、このアネモイアとどう言葉も『The Dictionary of Obscure Sorrows (存在しない感情を定義する辞書)』が生み出した造語であり、学術的な資料は存在しない。心理学の分野では、このような感覚は「歴史的ノスタルジア」や「代理的ノスタルジア」として定義されているが、その多くはメディアや物語、あるいは商品やブランドが喚起する魅力として論じられており、実際にその場に立ったときの体験を、十分に言い表しているとは言い難い。そこではノスタルジアは、価値として説

明されていて、個人における知覚としては捉えきれないのだ。

今回、「経験していない景色への郷愁」を説明しようと意気込んだが、どうやらここが行き止まりのようだ。うーん、なんか消化不良。しかし、個人的な記憶に結びつかないが、自己がその場と連結されるような感覚——いわば「普遍的ノスタルジア」と呼べる何かがあるような気がするのだ。事実『The Dictionary of Obscure Sorrows』にも、この感情が収録されているのだから、多数と言わないまでも一定数の人間がこの感情を持ちつつも、既存の用語で定義づけられないままにいるのだろう。

科学的に証明不可——であるとするならば、あのとき霧のかかった平原に抱いた感情は、きつと幽霊が私の知覚を借りてみた景色だったのだ。今は、そういうことにしておく。

ときめく本棚の魔境編

読んでない読書(3)

おぎはら きえ

(蔭山)

年明けから心躍ることがあった。

ある程度の蔵書をお持ちの方ならもはや当然のことかと思うが、私の本棚は一段の棚に手前と奥と二重にして本が収められている。大まかなジャンルと判型、作者でまとめと並べており、既読本と未読本は混在している。今年はず読本を減らすぞと、棚をチェックしていると奥の方に山崎豊子著『白い巨塔』(新潮文庫)を発見した。全五巻、ちゃんと揃っている。すごい!これ読みたかったんだよねー、と自分の本棚なのにふらりと入った古本屋の棚で見つけたようなときめきを感じた。『白い巨塔』長いから、図書館で借りるより買ってしまった方が落ち着いて読めるだろうと買っておいてくれたんだ、私が。

自分で買って自分で棚に収めておきながらすっかり忘れていたということなのだが、すっかり忘れすぎていて、新鮮に喜んでしまったことに我ながら驚いた。

前号でも触れたが、定有堂教室「ドゥルーズを読む会」で読んだ松本卓也著『斜め論』(筑摩書房)をきっかけにハイデガーをもうちよつと勉強してみようと思った。『存在と時間』をいきなり読んでも挫折するのは目に見えていたので、解説本から入ろうと「ハイデガー」をキーワードに書籍の検索を試みた。その中に木田元著『ハイデガーの思想』(岩波新書)があった。木田元の著作なら「ドゥルーズを読む会」で『反哲学史』(講談社学術文庫)と『現象学』(岩波新書)を読んだことあるし、文体自体は読みやすかったからいいかとも思いつながら、以前読んだことをなつかしんで本棚を探してみたら『現象学』の隣に『ハイデガーの思想』が並んでいた。啞然とした。いつからそこにいたんだ。

これも以前本誌で触れたことがあるが、私は「図書館日和」という蔵書検索アプリを利用しており、そのアプリ内の読みたい本リスト(仮想積ん読と呼んでいる)に千冊以上の本を登録しているのであるが、それを遡ってみると二〇二三年の十二月に「(本誌発行人の)奈良さんオススメ」というメモとともにこの『ハイデガーの思想』が登録されていた。図書館で借りる前に古本屋で見かけて買ってしまっただと思う。

読みたい、借りて(買って)こなきやと思った本がノー

タイムで読みはじめたことに感動した。勧めてくれてありがとう、奈良さん。買っておいてくれてありがとう、過去の私。木田元さんはハイデガーの『存在と時間』執筆以前の経歴から丁寧に解説してくださっていて興味深く読んでいるよ。

読むペース度外視で本を買ってしまう原因の一つに「もう古本でしか手に入らない作家（作品）を好きになってしまった」というものもある。私にとって吉田知子の著作がそれで、最初は図書館から借りて読んでいたが「（貸出期間の）二週間だけなんて耐えられない！ずっとそばにいて」と古本のネットショップを検索し、あればすかさず買って集めている。

ここで一つの結論に至った。五冊十冊程度の積ん読であれば「今後のお楽しみ」と言えるだろう。これが二十冊三十冊と溜まってくると自分の読書ペースが追いついていない不甲斐なさと「お金の無駄遣いでは？」という不安で本棚を見ると心が痛んだ。しかし未読本が一体何冊あるのかわからなくなると、自分の家の本棚がもはや本屋の棚のように見えてきて楽しくなる。

以前ミニマリストに憧れて、「至高」「また読みたい」という本だけ残し、そこまで思い入れがない本、何年も未読のままの本は処分したことがある。今思えばそういう本

でも私の志向、興味関心の遍歴だった。とうの昔に処分してしまった、小学生の頃に読んでいた何百冊もの漫画本も含めて、後悔とまでは言わないけれど、アルバムを見るようにそれらが収まった本棚を眺めてみたかったなあ、などと思う。

先日、Xで夏葉社の島田潤一郎さんの投稿を読んだ。

『昨年は話題の本は読まず、ひたすら積ん読解消に力を注ぎました。結果、学生の頃に買った本をはじめ百冊以上の積み本を読むことができました。買った本は読まないと気がすまないというばくとって一番攻略が難しかった本は「百円だから買った本」です。そんな動機は本を読むことの助けにはなりません。』

『「百円だから買った本」との格闘はきつと死ぬまで続きます。どうせまたヒヨイヒヨイ買うはずなので。』（二〇二六年一月七日の投稿より）

私も島田さん見習って今年は積ん読の山を崩すことに注力しつつ、堂々と補充もしていこうと思うのだった。

Own Up Time

高木 善祥

(SHEEPSHEEP BOOKS)

先日、鳥取市内の高校にお邪魔してきた。授業でブックカバーをデザインすることを企画し、その前段として「本屋さんに話を聞こう」となったそう。美術を選択している八人の生徒さんの前でお話する機会をいただいた。

何を、誰に伝えたいのか、目立たせたいのは著者・タイトル・装丁のどれか、書店の店頭に並んでいる状態をイメージするなど、売る立場から本のデザインをお話した。

一般的な話をするだけだと面白くないかなと思ひ、生徒さんが選んだ本を事前に教えてもらっていたので、「次に読んだら面白いかもしれない二冊」をそれぞれ紹介した。

せっかくなので一例を挙げておく。『ウサイン・ボルト自伝』(集英社インターナショナル)を選んだ生徒さんには、ポール・ギルロイ『ブラック・アトランティック』(月曜社)と矢沢永吉『成り上がり』(角川文庫)を紹介。

前者は、もともとボルトはクリケット選手を目指してい

たことから、発祥の地であるイギリスとジャマイカとの関係を踏まえて分厚い社会学／思想書を。後者は「成り上がるためにはプロスポーツ選手になるかロックスターになるか」の二択だった時代の話のネタとして。(ちなみに矢沢永吉のことは生徒さん全員知らなかった)

生徒さんが選んだ本が驚きかつ納得するラインナップで、二冊×八人分の計十六冊を選書するのはなかなか大変だったが、高校生の本に対するリアルな話もきけたので、とても楽しい仕事だった。

*

あるクリニックから依頼をいただき、七十点ほど選書した。店の宣伝も兼ねているので、

- ① 定番として店でコンスタントに売れているもの
 - ② 来院される方が気軽に手に取れそうなもの
 - ③ その地域に関するもの
 - ④ 院長やスタッフの皆さんのオススメ
- を元に考え、選書リストを何度かやり取りして、NG事項を共有していく。

・前向きな内容であっても「死」やそれに近い言葉が書名にあるのは外す

・社会問題に関するものも、個人にとってはデリケートな事柄なので外す

・理系の読み物は、自分（リクリニックスの院長）が未読だとエビデンスが保証できないので外す

など。手に取るのは体調を崩してリクリニックスに來られてゐる方たちなので、言われてみればごく当然の指摘だった。そこに気づけなかったことを反省し、次に活かそうと思う。

ちょっと話はそれるが、先方とリストを共有するために、ISBNを入力すると書影と書誌情報が表示されるグーグルスプレッドシートを作成した。こういう仕組みづくりが、地味に楽しく相変わらず得意である。

*

二月発売予定のある本を仕入れるかどうかで悩んでいる。複数の書店員が自身の仕事について書いたエッセイ集といった体で、SNSでは少し話題になっている。

しかし発行元のプロモーションは、業界や出版社への不満や愚痴が前面に押し出されていて、どうにも食指が動かない。書き手は名の知れた書店員ばかりなので、それだけではないだろうが、「今更そんな話題にフォーカスされてもなあ」と思ってしまう。

個人的にはそう思う一方で、読みたいお客さんがいる可能性はある。商売である以上、顧客の求めるものは（公序良俗に反するものでなければ）仕入れて店頭に並べるのは本屋として当然のこと。

たった一冊であっても、本を選んで仕入れることの悩みは尽きない。（でも楽しい）

【参考文献】

『読んでいない本について堂々と語る方法』ピエール・バイヤール ちくま学芸文庫

まだ発売されていない未読の本を批判的に取り上げることの罪深さ。ちなみにこの本も読んでません。

『柳田国男入門』鶴見太郎 角川選書

今年は民俗学を学ぼうと思っている。版元品切れなので、角川ソフィア文庫あたりに入ってくれないかな。

『人といることの、すさまじさとすばらしさ』きくちゆみこ トワイライト
良いタイトル。

定有堂ビル2階 古書・新刊の本屋

SHEEPSHEEP BOOKS 店主 高木善祥

本を作る側から (35)

村瀬 謙介

(小取舎)

素晴らしいタイミングで心が荒むようなちよつとした出来事が複数重なり、年末から年始にかけて病んでいた。とはいえその期間に会っていた方にはそんなそぶりを見せるわけはなく、表面的には普通に過ごしていた。病院にいくようなほどではないと思い自分でパソコンで色々調べたりするとあるサイトの「はい」「いいえ」で答える簡単な診断をする和中程度のうつ状態ですと診断された。最もクリニックのサイトなのでそれで診療させようって手だとバレバレなのでそつと閉じた。そんなわけではない。気分転換をしようと思うがこのところ天候が悪いのでバイクにも乗れない。体感温度が外気温マイナス五度くらいになるのもきつい。温泉にいつても何かさっぱりしない。ちよつとしたことでイライラするし悲観的になる。いや、本当にまだあまり人と会わない年末年始でよかった。こんな感じになるのは初めてに近い。少々息抜きが足りなかったか。思えば

二〇二五年を一字で表すと「駆」だった気がする。割と村瀬謙介というキャラクターのせいか悩みなどないような印象を持たれることが多いようで、そんな中話を聞いてくれた友人がいつもの気分を取り戻すことができた。

というわけで(?) 前回の音信不通の締切を終わったあたりからジャーナルをつけている。ダヴィンチやゴッホなどの偉人をはじめ、チャットGPTを作るオープンAIのサム・アルトマンも活用しているそうだし、心への効果もあるらしい。何があっただけでなくその時の感情も記録するのがジャーナルのミソらしい。媒体は何がいいかなと考えて、ジャーナル用のアプリで日々の記録をひと月つけていたが気づいたが、やはり手で書く方が良さそうだ。アプリだとかさばらないし、いつでも携帯しているのでそこは便利だが、見返すにはノートの方が良い気がする。

スケジュール帳はもう何年も無印良品のスケジュール帳を使っている。手帳の前半は見開きに月のカレンダーの枠があつて、手帳後半は左頁が週の枠、右頁が方眼がついた自由帳。長年それを使っていたが新作がリリースされたので二〇二六年用にはそれを買った。前半は一緒に月のカレンダーだが、後半は一日ごと四日分が見開きに。日付

部分を書く所が空いているので詰めてかけるから良い。このスケジュール帳、日付が全く書いていないので自分でカレンダー部分に日付も書き込まないといけない。日記はスケジュール帳には書かないので打ち合わせ内容を後半ページに使う。たまに手帳を持ち歩いていない時に予定が入ることもあるので。グーグルカレンダーにも手帳に書き込んだ予定と同じものを打ち込む。スケジュールは他人との打ち合わせや支払いやイベントなどの予定しか書かない。その日のタスクは手帳でもアプリでもなくA4用紙の裏紙などを使って日付とTODオリストを書く。

ペンは三色のフリクション一本と普通の黒ボールペン、ちよつとしたお絵描きメモ（言語化するより絵で残す方がいいアイデアもある）用のタッチペンの三本を持ち歩いている。

ノートの書き方を紹介した書籍や動画を色々見たが、自分に合うかどうかは試してみないとわからない。自分には合わないと思うものがほとんどであったが、それでも諦めず試してみてもこれはいいなという部分だけを抽出して最適解を詰め込んだオリジナルのノートができれば良いと思っている。が、結局飽き性なのでフォーマットを作ると変え

たくなるのだろうな。やはり自由帳が自分には合っているのだろうか。

そんな感じなので打ち合わせをする際、他人の手帳やノートの使い方が気になる。相手の手帳に付箋がたくさん付いていたり、色々なものを挟んでベルトで留めている手帳を見ると打ち合わせ内容よりそちらに何があるのか気になってくる。鳥取の文化人の皆さんの思考方法が気になる。一体何にどう記録しているのか。

小取舍の最新刊

『人間疎外の時代』

高取正人 著

本体二〇〇〇円

発行 2025.11



論語について（9）

小原 修治

（県立高校教諭

湯梨浜町松崎在住）

子曰、君子周而不比、小人比而不周。

（為政篇第二・第十四章）

子〔し〕曰〔い〕はく、君子は周して比せず、小人は比して周せず。

『論語』には全く同じ句が別の篇に収録されていることがある。例えば、「巧言令色、鮮〔すくな〕きかな仁」は、学而篇と陽貨篇とに見える。本章の場合は、全く同じではないが、子路篇に「子曰、君子和而不同、小人同而不和（子〔し〕曰〔い〕はく、君子は和して同せず、小人は同じて和せず）」という章があり、本章とこの章とは同一内容の異文だとする説がある。乾一夫の論文「君子への基礎資格——孔子における君子観の基底」で説かれている説である。

それによれば、本章の「周」の字は「調」の字の省体の仮借用法と見られる。事実、『広雅』には「周は調なり」の説解があり、更に『説文解字』に「調は和なり」とあるから、本章の「周」の語を子路篇の「和」の語と同概念と見ることが出来る。また、本章の「比」の語についても、『礼記』楽記篇の鄭注に「比は猶〔な〕ほ同のごときなり」とあるのみならず、『広雅』には「比は輩なり」とあり、『広韻』には「同は輩なり」とあるから、これを子路篇の「同」の語と同概念と見ることが出来るというのである。

右の論文では、両章について「その意は、「君子は意見は和合するが、ぐるにはならぬ。（それに対して）小人はぐるではあるが、意見は和合しない」ということである」と述べ、「小人の言は自己の利にはしり、各自でんでんばらばらのことを言つて、言い争うとの意を含めたものであるに相違ない。それに対して、君子は道義をわきまえているから、他人との調和を保ちながらも、存在としては民衆と一線を劃していることを言うのである」と説いている。また、『韓詩外伝』卷二に見える「君子は和し易くして狎れ難きなり」の句を挙げ、これを「君子は周して比せず」「君子は和して同せず」とほぼ同じ意味の句だとも説くが、その通りだろう。私見では、衛霊公篇の「君子は矜にして争はず、群して党せず」も、ほぼ同じ意味の句である。

一体、『論語』には「君子」と「小人」とを対比する章が十八もある。古来「君子」と「小人」との違いに定説は無いが、前に紹介した安田登の説では、「君子」とは心を使うと決めた人のことであり、逆に「小人」は心を使わず無意識の反応をそのまましてしまう「ふつうの人」のことだとしている。この点、先述の乾論文でも、述而篇二十五章の「子曰、聖人吾不得而見之矣、得見君子者、斯可矣。子曰、善人吾不得而見之矣、得見有恒者、斯可矣。亡而為有、虚而為盈、約而為泰、難乎有恒矣。（子〔し〕曰〔い〕はく、聖人は吾れ得て之〔これ〕を見ず、君子者を見るを得〔う〕るは、斯〔こ〕れ可なり。子〔し〕曰〔い〕はく、善人は吾れ得て之〔これ〕を見ず、恒有る者を見るを得〔う〕るは、斯〔こ〕れ可なり。亡〔な〕きを有りと為〔な〕し、虚〔む〕なしきを盈〔み〕てりと為〔な〕し、約にして泰〔ゆた〕かなりと為〔な〕せば、難〔かた〕きかな恒有ること」を引き、「君子」について似た説明をしている。

それによれば、右の述而篇第二十五章に見える「子曰、聖人吾不得而見之矣、得見君子者、斯可矣。（子〔し〕曰〔い〕はく、聖人は吾れ得て之〔これ〕を見ず、君子者を見るを得〔う〕るは、斯〔こ〕れ可なり）」の句と、「子曰、善人吾不得而見之矣、得見有恒者、斯可矣。（子〔し〕曰〔い〕はく、善人は吾れ得て之〔これ〕を見ず、恒有る者を見るを得〔う〕るは、斯〔こ〕れ可なり）」の句とは、前者の句に見える「聖人」と後

者の句に見える「善人」とが同概念を表すと考えられるため、両者を同一内容の異文と見ることが出来る。すると、前者の句に見える「君子者」と後者の句に見える「有恒者」とがまた同概念を表すことにもなり、「君子」とは「恒有る者」だということになる。

では、「恒有る者」とはどういう人か。乾一夫によれば、それは『孟子』梁惠王上篇に言う「恒心有る者」のことである。そして、「恒」や「恒心」の語こそ「君子」の概念を説明するキーワードだとして、次のように説いている。「恒」が「心」に従う字で、固定して動揺しない心の意であり、後の「恒心」と同じである以上、先の聖人・君子観には、精神的側面により多くの比重がかけられているであろうことが思われる。従って、君子概念の精神的基礎は、この「恒」すなわち「恒心」に立脚していると考えられる」。

右の乾説は、先に挙げた安田説とほぼ一致する。思うに「君子」とは、確固たる覚悟で揺れ動かない心を持つと決めた人のことである。だからこそ、本章に言うように、人と調和しながらも追従し結託することがないのである。

立春の卵

ムラカミヒロミ

(フライングブックマン)

立春が近くなると(今年は二月四日)、誰言うとなく話題に上るのが「立春の卵」である。普段は立たない生卵が、立春の日に限って立つ、といういささか都市伝説めいた話である。

我が国では、昭和二十二年から広まり始めたらしいが、新聞に載った、元々は中国の古書に由来する云々、の出自こそいかにも都市伝説のセオリーどおりで胡散臭いが、その後、気象台や新聞社が実際に実験をして立つことを証明して見せた所に偽りは無い。

さもあらばこそ、物理学者である中谷宇吉郎先生、俄然張り切って、この謎を解き、実証せんとされた訳だ。その顛末を書いたのが、「立春の卵」(世界二十二年四月)。氏は、「雪は天から送られた手紙である」の言葉で知られた「雪博士」である。

「太陽の視黄経が三百十五度になった時が、立春であって、年によって少しずつ異なるが、だいたい二月四日頃に当たる。地球が軌道上の或る一点に来た時に卵が立つのだから、卵が三百十五度という数値を知っていることになる。」

そんな馬鹿な話はない、という訳で、先生、弟子に卵の表面を顕微鏡で調べさせ(前後の細かな説明は長くなるので省略するが)、要するに、卵の殻は凸凹だらけで、そこかしこに微小な突起がある。その突起の三点乃至四点の間に重心を持つてくるようにすれば「立つ」ということを証明した。「これで卵の立つ力学はおしまいである。」

卵は楕円形をしているから、転がってしまうのであって、四角だったら、何の苦勞もない。

そんな発想で書かれた小説がある。

サキの短編(というより、ショートショートと呼ぶべきか)で、そのものズバリ「四角い卵」である。

卵は、転げて割れて無駄になってしまうことが多く、主婦たちを悩ませている。これを解消するにはどうしたらよいか。卵を四角にすればよい。多くの鶏を飼い、少しでも四角

に近い卵を産む鶏を選び分け、同じ傾向を持つもの同士を掛け合わせ、何代も重ねて、遂に四角い卵を産ませることに成功した、と自称する男に投資を持ちかけられる話である。

サキという作家は、シニシズムが服を着て歩いているような人であった。ブラック・ユーモアもここに極まれり、というくらいに黒い作風で知られているが、この短編は彼にしては、ずいぶんと大人しいオチになっていて拍子抜けする。

「卵の四角と女郎の誠、あれば晦日に月が出る」という言葉が、あり得ないものの譬えとして、江戸時代にはよく使われた。

しかし、今や、四角いメロンやスイカがある御時世であり、四角い卵も、調理レベルなら珍しくない。卵焼きは四角いフライパンで焼くのではないか。

まあ、四角い卵を産ませるのは、不可能だろうし、そのような試み自体、動物の生理に反しているから批判も出るだろう。

一方、同じ作者の「イースターエッグ」は、かなりどす黒い。ストーリーの紹介そのものが、ネタバレになってしまうの

で、興味のある向は是非原典に当たっていただきたい(『クローヴィス物語』所収)。

総じて、ミステリやホラー小説に出てくる卵は、何が生まれてくるか分からない、という所に恐怖がある。「イースターエッグ」もそこがミソだが、他にも夢野久作の「卵や」、高橋克彦の「不思議な卵」があり、漫画では夢野一子に「虹色の卵たち」という秀逸な特撮パロディーがある。

そんな特撮ドラマの雄「ウルトラQ」には、不思議に卵ネタが多い。「ゴメスを倒せ!」「宇宙からの贈りもの」「虹の卵」「海底原人ラゴン」「宇宙指令M774」、いずれも卵が重要なモチーフだ。

映画だと、「モスラ対ゴジラ」。ザ・ピーナッツの「卵を返してください」の台詞はよく知られているし、「空の大怪獣ラドン」も、卵が印象的な描かれ方をしている。

内坪井町日記（20）

齊藤仁昭（ケバブジョンソン・

元長崎書店勤務）

十二月某日

もうバンドなんてやめてき、浮いた交通費とかで子どもに服とか本でも買ってやったらどうだいというさきやきが、長時間通勤中の私の頭のなかから頻繁に聞こえる。これが魔が差すというやつ？ 使い方間違ってる？

頭を振って、その考えを振り払う。しかし、振り払う方が間違っているのじゃないのか、というところまで考えるようになってしまった。確実に歳を取っている。しかし実際、子どもにお金回してあげないのはすごいダメな親なんじゃないだろうか。後ろめたさに負けそう。

就職などのタイミングでバンドやめちゃう人が多いのは、この種のさきやきにしかるべく耳を傾け納得しているからなのだろうか。

なぜこうも続けてしまうことができたのか。それは杉浦と橋本の曲が好きだからというだけなのだが、もうひとが

んばりするか、とまだ踏みとどまれている。別に他人のためではないのだが。でも子どもを犠牲にしちゃだめだよな。。

十二月は三日しか休めなかった。そのうち二日はケバブジョンソンの練習で、一日はライブだった。とにかく疲れてしまったのでそんな風に思ってしまったのかもしれない。

邪念？ を振り払う際に「ECDの“東京っていい街だなあ”という曲の“そんなことないって言ってくれよ、ベイビちゃん”というフレーズが浮かんた。文脈は全然違うのだが。

十二月某日

京都にてライブ。揚子江の12インチを作ってくれたレーベルオーナー丸山さんの誕生会。会場にピアノがあったので全曲ピアノアレンジでやってみた。音量がむずかしかったが楽しくできた。とてもいい会場で、食事もお酒もおいしかった。新曲もやってみたが、悪くない手ごたえだった。

十二月三十一日

夕方から神社で準備をし、22時ごろから初売り開始。天

気も良く、多くの参拝客が妙見宮を訪れる。お店にもぎわいい、仕事しているとあつという間に日付も変わって午前3時。いったん撤収し、仮眠タイム。今年は贅沢して宿を取ってしまった。短い時間だったが、安眠できた。もうさすがに車で寝るのはきつかな…。寒さが堪える。

一月一日

六時に集合して初売りの続き。晴天がとてもすがすがしい。夕方までしっかり販売し、終了。

今日は夕方から家族が八代に来て、四人で宿泊することになっていた。子も喜んでいる。そうかもと稼げばバンドの後ろめたさもなくなるのかな。両方やればいいんでないか。やるぞ俺は。

実家の母から預かったお節を妻がもってきてくれたので、宿でちびちび食べながら少しだけビールを飲んで、こちゃこちゃ子どもたちと楽しい話をしながら就寝。

翌日と翌々日まで初売りを続ける。

一月某日

先月から年頭までがんばって働いた反動で燃えつきて仕

事ははかどらない。

一月某日

そんなこんなだが懲りずに練習。練習前に時間があるのだが、東京で行きたいところが特になくて困る。長澤信子『台所から北京が見える』（筑摩書房）を喫茶店で読みながら時間を過ごす。まっすぐで熱心で、ユーモアを忘れない文章って、今だと誰が書いているのだろうか。そんな人の本が読みたい。

女神転生というRPGゲームを知っていますか？僕もうる覚えなのだが、主人公の行動次第で自身が天使的になるか悪魔的になるかが決まっていく要素があって、当時は悪魔にならないように気を付けていたような記憶がある。で、今ですが、なんか社会が悪魔的なものに寄っていつているように感じており、ちょっと不穏な気持ちがあります。みなさんどう感じていますでしょうか。

迷った先のわたしの言葉

三浦 永理

(三十一歳・女性)

ロンドンに来てまで、私がやろうとしているのは、日本の教育に関わる研究だ。といっても、日本の人口は減っていく一方だし、円安の影響も大きい。海外で過ごしていると、日本の凋落は明らかだ。

私が学部時代を過ごした十二、三年前、旅行したロンドンでは物価の高い街だった。それでも日本の一・五倍くらい。今は、スーパーで適当に売っているサンドイッチが三・五ポンドか、四ポンドとなると、七百から八百円。アホらしいほどの物価で、イギリスも日本もある意味でタガが外れた状態だ。

そんなイギリスで教育業界の展示会である「BETT 2026」に参加した。いわゆる Google のような企業から、小さな EdTech 企業まで様々な会社の様子を見られる機会だった。会場には、ヨーロッパからだけでなく、中国の企業や、韓国の企業、韓国政府のブースまであったのに、日本の企業は二、三社。「日本はハイテクの国でしょ」というまだ昔

のイメージを持ってきている外国人も同世代にはいるけれど、「この状況を見てよ、いずれなくなると思うよ？」と返してしまった。人口も減っていくのに、外に出ていく元気もない日本。そんな日本に戻って意味があるのか、少し考えようところもある。

が、教育というのはグローバルな視点で共通している問題と、ローカルにしか存在していない問題がある。

会場ではAIという言葉がしきりに繰り返される。AIによって便利になる。AIによって時間は短縮されるけど、仕事がその分減るわけではないのでは？勉強時間も短くなるのか？AIの質の保証に対して、どのように政府が介入すべきか？ディープフェイク画像による性的ないじめにどう対応するのか？などなど。これらは、正直世界中(生徒にデバイスを与えてしまえば)どこでも起きうる問題だろう。Googleの会場では小学生がプレゼンターとして、AIの活用方法を答えていた。

「AI searches. I think. (AIが検索して私が思考する)」

知識の基盤を準備するのは、教科書ではなく、AIになる。かつては情報を整理するために集めるところから、人間の批判的思考は始まると言われていた。その段階の線引き

は、変わっていくのかもしれない。

会場では、初めてイギリスの国語の授業の模擬授業を見た。MicrosoftのOneNoteを活用した授業で、教員は授業中に机間巡視(いわゆる教室を歩いて回る)ならぬ、タブレット間巡視をしていた。課題を書き終わった生徒にその場でフィードバックを書き込んでいくのだ。タブレットの操作画面を観察することができるので、紙の頃より如実に進捗を把握できるという。そこで、オランダの教員の一人が「生徒がタスクを終えてしまつて、他のサイトを見ているということはありませんか?」と質問した。その質問は、私も教員をしていた頃に何度も考えていた問題だった。授業をしていた教員は「生徒のことはヘリコプターのように見て回つていきます。生徒もスクリーン上を見られていると知っていますから、変なことはしません」と答える。が、テクノロジーを用いた管理教育はどうなんだ、怖くないかと思つてしまった。私自身は、落書き同様なくすることはできないし、それも一つの教室でのあり方だとは思ふ。

翻つて、私が取り組もうとしているのは、英語と国語の連携、つまり言語教育を通して、批判的思考力や表現力を磨けないかというものだ。しかし、このように「英語は外国語で習得が困難」「それでも経済のために英語が必要」「国語つ

まり日本語はほとんどの生徒にとつての母語で流暢に扱える」という「二重の単一言語主義」前提の教育は、日本という国の歴史的背景、経済的背景によつてこそ、成立しているもので、非常にローカルな取り組みだ。Multilingual(多言語な背景を前提とするロンドンの教育現場と、日本の教育現場の状況は異なる。実際、日本でも移民の数は増えているものの、ロンドンの superdiversity とも言われる状況は、その比ではない。いくら経済的に衰えようと、英語という言語によつて、移住のハードルは下がる。いくら学費が高くなろうが、私のように勉強をしにくる学生の数も減ることはない。

自分の教室の文脈で考えてきた私がどうやってグローバルな物語に自分の考えをのせることができるか、考えることもある。そして、ロンドンの研究の場で、私のローカルな研究が何のインパクトを与えられるのだろうかとも思う。そんな時に自分が過去に書いた言葉を振り返つた。そこにあるのは、小さな声。小さな物語。自分の身の丈で、精一杯生きた声だった。大きな物語。理論化。一般化。その逆の小さな積み重ねが真理を見つける時もあると、過去の自分からの戒めでもある。

としのはじめのめがねとて

あきの素生

(くうねるめがね)

年始から雪に翻弄された。冬になる前から、今シーズンは雪が多いらしい、と言われていたが、そう言ってあまり降らない年もあるし、と呑気に構えていた。今回は予測が当たり、年明け早々、列車の運行情報や道路に備え付けられているWebカメラの映像の確認に明け暮れるはめになった。道路の予防的な通行止めも実施されたりして、鳥取にたどり着く手立てがなくなることもあり得るのだと身に沁みて感じた。

雪が積もると、非常時スイッチが入るのか、アドレナリンが出ているような感覚に陥る。決してうれしいわけではなく、できればあまり積もってほしくない。にもかかわらず、例えば雪かきをするときなどは、俄然張り切る。後でどつと疲れるし、筋肉痛にもなるのだが、そのときのその感覚は、嫌いではない。近所で、除雪後交差点に集められて山になっている雪に、人が一人入れるくらいの穴をあけて、かまくらが作られていた。こういった、誰かが雪を

楽しんだ跡や、新雪につけられた動物の足跡などは、うんざりした気持ちを晴らしてくれる。

そんな年のはじめに、最も気持ちを晴らしてくれたのは、家に届いた新しいめがねだった。

年末にふらりと入っためがね店で作っためがねだ。以前、サウナ用めがねを購入したと書いた。様々な機能を備えためがねが生み出されていることに感銘を受け、以来、そのめがね店を見かけるとほぼ毎回足を踏み入れている。そして、ほぼ毎回新たな発見がある。とはいえ、毎回めがねを購入することは難しく、後ろ髪を引かれるような思いで店を後にすることが多い。

お気に入りのめがね本で、とにかくいろんなめがねをかけてみるのがすすめられていたこともあり、めがね店に入ったら、形や色にこだわらず、あれこれとめがねをかけてみる。以前は、レンズの形が横長の楕円形になっているオーバルや横に細長い長方形のスクエアを好んでかけていたが、真四角に近くて存在感のあるウェリントンや丸みのあるボストン、さらにまん丸のラウンドにも憧れがあり、自分に似合うものがありやしないかと期待を込めて試している。似たような形のめがねでも、ブリッジの位置ひとつ

で印象が全く異なるのが興味深い。ちなみに、『Dr. スランプ』のアラレちゃんのめがねについて検索したら、A Iが「ボストン」だと解説してくれた。私のイメージではウェリントンだったので、思わず画像検索までしてしまった。その時々で微妙に形が違うようで、どの形と断定することは難しそうだ。

もともと、めがねに惹かれたのは、音楽雑誌で紹介されていた或るアルバムのジャケットを見たことがきっかけのひとつだったように記憶している。黒いセルフレームの個性的な大きいめがねをかけたアーティストの写真。黒縁のめがねってかっこいいなと思った。当時、流行っていたのだとも思う。件のアーティストのようなめがねは自分にはハードルが高すぎたが、黒縁のスクエア型のめがねを買ってもらった。なりたいたい自分に近づいたようでうれしく、学校にめがねでも行くようになった。

以来、赤や紫、べつ甲柄のセルフレーム、下半分にだけふちのあるアンダーリム、度が強く、レンズが厚くなりすぎるため手が出しにくい細めのメタルフレームを伊達で、など、いろんなめがねをかけてきた。めがねをかければかけるほどこだわりが生まれ、新たに得た情報でそのこだわりを手放したり上書きしたりして、今に至る。

そんな中で、これがほしいな、と感じためがねがあった。機能が目新しく、自分のこだわりを叶えてくれるものだった。試着して、形や色もこれだと思えるものが見つかった。でも、当時からいためがねがとても気に入っていたので、すぐに迎え入れることはなかった。

それからしばらく経ち、たまたま別の店舗の前を通りかかった。チエーン店で、いろんな場所に店舗があるのだ。しばらくめがねを買っていないし、そろそろ許されるのではないかと思い、例のめがねを探した。ところが、以前入ったお店とは品揃えが異なり、目当てのめがねは置いていなかった。とても残念だったが、せっかく来たのだからここでもまためがねの試着にいそしんだ。すると、ほんの少し変わった形のめがねがあり、それがすっかり気に入ってしまった。めがねにもご縁や一期一会みたいなものがきつとあるのだと自らに言い聞かせ、スタッフの方に声をかけた。

レンズの取寄せ等でめがねができるまで半月くらいかかると聞いていたのが、ずいぶん早く送られてきたので、思いがけずうれしい年明けとなった。今年もまた、新たなめがねとの出会いがあるかもしれない。

冬の「おとんグルメ」



ドラメリア (座敷わらし)

今年の鳥取は雪が多い。しんしんと雪が降る冷え込んだ夜は、何か温かい食べ物が欲しくなる。そんなときに思い出すのが、実家の父お手製の夜食ラーメンだ。夜ふけに二階で勉強していると、トントンジユワーと美味しそうな気配がして、呼ぶ声に階下へ降りていくと、姉と私二人分のラーメンが出来上がっている。これが実に美味しくて、ささっと何か作るのが得意な父の「おとんグルメ」の中でもとりわけ強く印象に残っている。

凝った食材を使っていたわけではなく、調理方法も至って簡単だったと思う。炒め物至上主義の父が、そこらのキャベツやもやしや何やかやを適当に炒めて、更に卵も適当に炒めて、袋ラーメンを二つに分けた丼の上にとっさり盛り付けただけ。それなのにどうしてあんなにも美味しかったのか。一人分を二人で分けたからこそその少し物足りないボリユーム、夕食をきっちり食べたうえ更に夜中にもりもり食べる背徳感、勉強を頑張っているご褒美であるという達成感……そんなものも味を引き立てるスパイスになっていたのだろうか。時々思い出してあの味を再現しようと試み

たが、自分で作ると何の変哲もないインスタントラーメンにしかならず、野菜はたっぷり摂れるものの、あのわくわく感は乏しかった。

なお白状すると、「夜更けに勉強していると」と書いたが、勉強を頑張った記憶はほとんどない。実家時代にもっとも上達したのは、自室の引き戸（鍵をかけられないという悲劇）を外から開ける気配がしたら、すぐさま読んでいたミステリ小説を隠して問題集を解いているふりをする、という早業だった。真面目なふりは昔から得意だったなと思う。



・編集後記:

今年の鳥取は雪が多く通勤も雪かきも大変ですが、実は雪は大好きです。いつもと違う通勤ルートも面白いし、雪が降る光景をいつまでも見ていられる。先日の夜はとても気温が低く、冷えた道路に散った雪の粒がきらきらして氷砂糖のようで、とても美味しそうでした。

ドラメリア (編集長)

新しい仲間今回から堀内菜摘さんが加わりました。いま仙台在住。転勤組です。変わるもの変わらないもの、その交わるところで、書き続けてくださることを期待いたします。

奈良敏行 (発行人)